

「小豆でつながる地域の輪」

～喜多方市立熱塩小学校の取組から～

佐藤 仁

はじめに

「赤飯と一緒に笑顔と元気を届けよう」このスローガンのもと、今年度も本校の5年生が喜多方市小学校農業科の学習の一環で「笑顔の赤飯配り」を行った。「笑顔の赤飯配り」とは、本校の田んぼと畑で育てたもち米と小豆を使って赤飯を作り、熱塩小学校区に住む一人暮らしのお年寄りに、赤飯と一緒に笑顔と元気をお届けする取り組みである。

「いつまでも元気でいて下さい」「僕たちが育てたもち米と小豆で作った赤飯です。どうぞ食べて下さい」という言葉に手紙を添えて、温かい赤飯を届けると、「おかげ様で百歳まで生きられます」「夕ご飯にいただきます。去年もおいしかったよ。」「また遊びにおいで。」と皆、笑顔になる。なかには感極まって思わず涙してしまう方もいる。「早速、先祖様にお供えして、報告いたしました。夕食には、レンジで温めてお気持ちとをじっくり味わいました。その後、埼玉に住む二人の息子にメール送信し報告しました。私は熱塩村に生まれ、熱塩

小は学んだ懐かしい母校ですので、なおいっそう心にしました。学ばれる時間はぶかれ、炊いて届けてくれたことはいつまでも忘れません。元気もいただきました」と、手紙を書いて下さった方もいた。

初めはあまり興味の向かない子もいたが、赤飯を渡してとても喜んでお礼を言ってくれる高齢者の姿をみて、その思いが変わっていった。「おじいちゃん、おばあちゃんに喜んでもらえて本当に良かった」と、恥ずかしがりながらも自然と笑顔になっていった。

喜多方市立熱塩小学校と農業

本校は福島県の北西部会津盆地の最北端に位置し、夏は涼しい反面、冬は寒さの厳しい地域である。平成18年1月4日に喜多方



直接届けることで、お年寄りの笑顔もはじける

市に合併し、熱塩加納村立熱塩小学校から喜多方市立熱塩小学校となった。自然環境にも大変恵まれた地域であり、北西部には2,000m級の飯豊連峰、北部から東部には磐梯山や雄国山など1,000m級の山々が連なる。

喜多方市では平成19年度より2年間、「構造改革特別区域計画」の認定を受け、農業の歴史や農作物の栽培方法などを学ぶ教科「農業科」を設置した。また、平成21年度からは総合的な学習の時間で「喜多方市小学校農業科」を継続設置し、稲作や畑作、それらを活用した調理・加工の学習を進めてきた。農業科は、作物を栽培したり、食したりする活動を通して、自他の命や地球環境について深く考えることができる学習である。また、様々な環境の中で土作り、耕作、作物の世話をを行うことにより、勤労の尊さを理解すると共に根気強く行おうとする強い心や体を育むことができる。さらに、食に対しての正しい知識を身につけたり、作物や生産者に感謝の気持ちを持ったりと、食への関心も高めることができる。この農業科の学習を本校で発展させたのが「笑顔の赤飯配り」である。

活動のきっかけ

本校では、農業科支援員の方と一緒に、校舎裏にある田畑で、米、トウモロコシ、大豆、小豆などを育て、収穫し、味わい、自然の恵みに感謝する気持ちを育てている。その活動の一環である「笑顔の赤飯配り」は、平成21年から始まった。以前から田植えや稲刈りで協力していただいていた

民生児童委員のアドバイスがきっかけだった。当時の鈴木卓校長が、「学校から農業を活かした新しい取組はできないだろうか」と、民生児童委員に投げかけたところ「熱塩加納地区は若い方が、仕事を求めて都市部に出てしまい、一人暮らしの高齢者が増えています。そこで、学校で育てた作物を使って作った赤飯を届けて、元気をお裾分けしたらどうでしょうか」と提案があった。

民生児童委員の皆さんには、その後も赤飯の調理や配達等で大変お世話になっている。子ども達と高齢者の方のふれあいの機会を作ることができたのも、地域のことをよく知る民生児童委員の提案とその後のお力添えがあったからだといえる。大変心強く、ありがたい存在である。この「笑顔の赤飯配り」の名前も、当時の5年生児童が考えた。まさに、名前通りのみんなの笑顔があふれる活動になっている。

農業科と農業科支援員

本校で行っている農業学習は、二人の農業科支援員の協力の下、体験学習が進められている。当然、赤飯の材料になっている



赤飯調理にも民生児童委員の協力がある

もち米、小豆も二人の支援員のご指導の下で育ててきた。農業科支援員の小林芳正さんは、「私たちは米を作ることはできない。米を作るのは稲であり、私たちは稲を育てている。農作物に感謝の気持ちを持つことで、その人の心も磨かれていくんだよ」と話してくれた。この笑顔の赤飯配りの活動も、大人が子どもの心に福祉の心や優しさを作ることはできなくても、活動を通して子どもを育て、子どもが福祉や優しさを自分自身が育てていくことのできる活動だと考えられる。

また、同じく農業支援員の菅井光信さんは「今は子ども達の心に一粒の種を蒔いているところである。この種は今すぐに実になるわけではない。芽が出て、育てていつか、何十年後に実を着けるために、農業を通して、いろいろなことを学んで欲しい。」と話してくれた。このように本校では、児童一人一人の成長を願い、民生児童委員、農業科支援員、教職員がお互いに連携し合いながら活動に取り組んでいる。

全校生で笑顔の赤飯配り

笑顔の赤飯配りは、毎年11月中旬に行っている。5年生の児童は年間を通して総合的な学習の時間の中で「ふれあおう熱塩のあたたかさ！」をテーマに福祉について学習している。それと同時に、全校生で4月から作物を育て、赤飯を作る準備をしている。年間計画は次ページの表にまとめた。表にあるとおり、笑顔の赤飯配りは5年生を中心に、全校生が協力して行っている取

組であるといえる。

これからの熱塩加納地区

熱塩加納町は、無農薬・有機栽培の農法を進めており、当然本校でも、無農薬・有機栽培で米や野菜を育てている。また、本地区の給食は地域の農家の方で結成されて



農業を通して子どもたちの成長を願う農業科支援員



5月のドロコ祭り。子どもはドロの子？



6月は小豆の種まき。おいしい赤飯には欠かせない作業

笑顔の赤飯配りに向けての年間計画

4月	学校田の土作り(6年生)	学校田に有機肥料をまく。数種類の肥料をムラができないように、丁寧にまいていく。
5月	ドロコ祭り(全校生)	熱塩小学校独自の行事。学校田で育つ稲が元気に、米が豊作になることを祈って、田んぼの神様に感謝する行事。一人一人が短冊に書いた願いを御神輿に貼り、田んぼの中を練り歩く。
6月	田植え(全校生)	全校生が協力しながら、定盤の線に沿って、稲を植える。元気に育つように声をかけながら心をこめて植えていく。植える前に、まずは小昼タイム(小昼とは、農作業の合間にとる休憩時間やおやつのことを指す方言。地方によってこびる、こびり、こびれと読む)。昨年度収穫したもち米と小豆を使って調理した赤飯を食べ、力を付けてから田植えをする。
	小豆の種まき(5年)	5年生が、収穫祭で調理するあんこ餅や笑顔の赤飯配り、来年のこびりに使用するための小豆の種を蒔く。
7月	田車押し(3~6年)	田の草取りのために、田車を転がす。有機無農薬栽培なので、田の草取りは大切な作業。
10月	稲刈り(全校生)	全校生が役割を分担しながら、稲刈りを行う。刈り取った稲は、天日乾燥し、収穫祭の餅や赤飯配りに使われる。
	小豆の収穫(5年)	収穫した大豆は、殻取り、選別を行い、大切に使われる。
11月	笑顔の赤飯配り(5年)	いよいよ赤飯配り本番。全校生を代表して5年生が笑顔と元気を届ける。

いる「まごころ野菜の会」の協力のおかげでお米や野菜の地産地消率が約90%のすばらしい給食である。地域の農家の方も2人の農業科支援員も子ども達に安全、安心な食べ物を食べて欲しいと願っている。熱塩地区を築いてくれた高齢者とこれからの熱塩を支える子ども達が交流する場面は多くはない。しかし、子ども達が育てた米、小豆で作った赤飯と有機・無農薬栽培の野菜を通して、お互いの心をつなげていることは大変嬉しく思う。

終わりに

本校の高橋吉博校長は、「喜多方市では、6年前から食農教育を教育課程に位置づけて『小学校農業科』を推進しています。大震災や原発事故に伴い、絆の大切さが叫ばれている昨今ですが、『土を耕し、種を蒔き、いのちを育み、いのちをつなぐ』農業科活動を通して、子ども達は、命の共生や思い

やり、環境について学び、豊かな心や社会性・主体性を育んでいます。5年生が行っている『笑顔の赤飯配り』はまさしく象徴的な活動です。自分たちが収穫した物が形を変え、目の前で感謝されることを肌で感じることでできた5年生の表情は、自信と喜びで満ちあふれています。『農業から学ぶ、作物から元気をもらう』を合い言葉に、今後も謙虚な気持ちを持って農業学習を進めていきたいと思えます」と述べている。

笑顔の赤飯配り(5年生)心を耕すファームステイ(6年生)といった本校の特色を生かした農業科の学習を進めることにより、児童一人一人が自然の豊かさに感謝したり、地域の方々とふれあい、自然の豊かな恵みや人間の温かさを感じたりする感性を育む活動をこれからも実践していきたい。そして、何よりも「『ふるさと熱塩加納』が好き」と感じ、郷土に誇りを持つ児童の育成を図るべく一粒の種を蒔き続けていきたい。